

伊地知季安と佐藤一齋：桂菴禅師碑銘作成過程に着目して

東, 英寿
鹿児島大学教養部：助教授：中国文学

<https://doi.org/10.15017/9665>

出版情報：中国文学論集. 25, pp.125-140, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



伊地知季安と佐藤一齋

——桂菴禪師碑銘作成過程に着目して——

東 英 寿

江戸時代、朱子学は官学となり幕府の教学を支配し、幕藩体制を維持する思想的支柱となった。この徳川三百年を支えた朱子学の書籍が我が国で初めて刊行された場所は、薩摩の地であり、それは江戸時代を遡ること百年以上前の室町時代の文明十三年（一四八一）のことであった。桂菴が伊地知重貞とはかつて刊行した『大学章句』がそれであり、世にこれを『文明版大学』（伊地知本大学）と呼んでいる。更にその十一年後の延徳四年（一四九二）に再刻されたものを『延徳版大学』という。

我が国で最初に刊行された朱子新注の書籍である『文明版大学』・『延徳版大学』の存在は江戸に入りしばらく経つとすっかり忘れられたものとなっていた。『文明版大学』が開版されて約三百年後の天保十一年（一八四〇）に薩摩の伊地知季安が江戸の大儒・佐藤一齋に『延徳版大学』や彼の著作『漢学紀源』などを送り届け、桂菴の碑銘の執筆を依頼する。これによって、一齋は薩摩が我が国に於ける宋学の先駆地であったことを初めて知るに至る。一齋は「題延徳版大学鈔本後」の中で、

今を距つること適に三百六十餘年、因りて本邦の新註を刻する嚆矢爲るに驚く。漢學紀源を讀むに及べば則ち薩人寔に肇めて宋學を傳ふるを知る。

と述べ、我が国の新注書籍刊行の嚆矢である『延徳版大学』の存在を知って、非常に驚くのである。本稿において

伊地知季安と佐藤一齋（東）

は、この『延徳版大学』を刊行した桂菴と彼の碑銘作成に力を尽くした伊地知季安に着目して、特に伊地知季安と佐藤一齋のやりとりの中から『延徳版大学』が世に知られていく過程、及び伊地知季安の行動が後世に与えた影響を能う限り明らかにしたいと思う。

二

桂菴は、室町時代後期の臨済宗の禅僧で、字は玄樹、号は烏陰、または海東野釈といい、周防山口の人で、応永三十四年（一四二七）に生まれ、永正五年（一五〇八）に亡くなっている。京都南禅寺の惟肖得敵について宋学を学び、業成りて後は長州赤間関の永福寺に住んだ。応仁元年（一四六七）四十一歳の時、その詩才が認められて遣明使の一員として明に渡る。滞在中、明の憲宗に謁見し、杭州・蘇州を遊歴して諸儒と交わり朱子学を学んだ。桂菴の明での勉学の有り様について『漢学紀源』巻二、桂菴第二十八では次のように言う。

賤禮既に竣り、蘇杭の間に遊び學校に出入して朱子の學を受く。博く曹端の四書詳説、其の他の註釋の粹なる者を窺ふ。潛心玩理して得ざる所有らば、輒ち鉅儒に就き審詢研究す。居ること七年業大いに進み、内外の精濶通悟せざるなし。

桂菴は、朱子学者・曹端の説など當時明で流行していた最新の朱子学をしかとその眼で見、じかに中国の儒者達から学んだのであった。桂菴の宋学研究の基盤はここで確立したと言っても過言ではあるまい。明に滞在すること七年にして、文明五年（一四七三）に帰国するも、都は応仁の乱のため石州（石見）に移住し、文明八年（一四七六）豊後、筑後、肥後を歴遊する。文明十年（一四七八）二月薩摩の島津忠昌の招聘に応じ、市来に赴き龍雲寺に寓し、十一年忠昌が桂菴のために開創した烏陰寺（桂樹院）に移った。この頃から、桂菴は学を講じて朱子新注を広め朱子学の振興に努めて、また太守忠昌のために書経集伝（南宋・蔡沈）を進講している。桂菴が薩摩に来て四年後の文明十三年（一四八一）六月彼の教えを受けた、後の国老・伊地知重貞（？一五二七）とはかつて朱子の『大学章句』を刊行、これが『文明版大学』（伊地知本大学）で、我が国朱子新注版の嚆矢とされる。この版が磨

滅したのでその十一年後の延徳四年（一四九二）に桂菴が桂樹院で再刊した。これを『延徳版大学』と言う。そして、これらは門下に教授すべく桂菴が創出した訓読法である桂菴点とともに薩摩の地で広く流布したのである。その後、桂菴は日向飫肥の安国寺に住し、日向と薩摩を往還した。文亀二年（一五〇二）に薩摩の伊敷屯に東帰庵を結んで隠居し、永正五年（一五〇八）六月にここで没した。八十二歳。桂菴の学統は、安国寺の月渚永乗、龍源寺の一翁玄心、大龍寺の文之玄昌と継承され、江戸初期頃まで栄えた。この様に薩摩の文教の礎を築いた桂菴を祖として、島津氏の領国薩摩と日向で展開した儒学一派を薩南学派というのである。

次に伊地知季安の経歴を簡単に説明しておく。季安は江戸後期を生きた薩摩藩士で歴史家として名高く、桂菴没後二百七十四年後の天明二年（一七八二）に生まれ慶應三年（一八六七）に亡くなっている。

季安の経歴を考える上で看過できない出来事は、文化朋党事件（近思録崩れ）に連座して遠島になったことである。この事件は、薩摩藩のお家騒動と言えるもので、時の藩主・島津斉宣の藩政の改革がその父・重豪の怒りを行い、切腹十三名、遠島二十五名、寺入四十四名、逼塞十九名等合計百十一名の大量処分が行われ、季安もそれに連座して文化六年（一八〇九）二十八歳の時、喜界島へ遠島になる。文化八年（一八一）に赦書が下り、翌九年に鹿児島に戻るが、文化十三年（一八一六）まで閉居謹慎を命ぜられていた。その後も依然として仕途の禁の逆境に置かれる。すなわち、季安は六十六歳まで無役で蟄居していたのである。ただ、この四十年間の不遇の期間に、彼は古籍を収集し、それを精読するという地道な作業を続けていた。たとえば、遠島後十九年経って、依然として無役であった四十五歳の時の作である『雲遊雜記傳』序には、

余也不肖ニシテ二十七ハヨリ党敗ニ連坐シ、躬ヲ三年ノ遠謫ニ苦シメ、心ヲ今ノ禁錮ニ焦シ、門ヲ杜キ深く慎テ此ニ世交ヲ絶ツコト通計十九年、昼ハ傭工シテ寒饑ニ充テ、夜ハ古書を獵テ其レト語ルニ、……

と述べ、昼は傭工として働き生計を立て、夜は古籍に向かい合うという生活を送っていたことが窺える。また、季安が五十二歳の頃に執筆した『管窺愚考』の自序には、彼が政治上の党禍に連座して二十六年が経ったこと述べた後で、

其の益々閑に就くや、雅に古編を愛し、凡そ聞く所に於て、苟も仮るに路あれば、力を極めて搜索し、殺青を

愜く臆へば、以て帳中に秘し、時に之と娛しみ、以て其の憂を忘る。

と言ひ、無官のために資料を閲読する機会に恵まれないので、自ら力を尽くして書籍を探し出し、それを借り精読して不遇の憂いを忘れていたことがわかる。逆境・不遇を発憤材料として学問に邁進していた季安の姿が浮かぶ。

この成果は陸続と著作として結実し、彼の代表作でこれを措いて薩摩藩史研究は成り立たないと言われる『薩藩旧記雜録』をはじめとして、今日に残された彼の著作・史料は極めて多い。また、季安が六十六歳の時召し出されるきっかけとなったのは、彼の『管窺愚考』（一名『島津御荘考』）の考証の精密さが島津斉彬の目に留まったからであった。誠に彼は歴史家としての才能、そしてその考証の正確さによつて官に登用されたと言えよう。その後、記録方添役、軍役方取調掛等を経て、七十一歳で記録奉行となり、御使番、町奉行格から御用人と進み、慶應三年（一八六七）に八十六歳で亡くなっている。

さて本稿においては、数多い季安の著作の中より考察の手がかりとしたのは『漢学紀源』である。なぜならば、以下に述べるように『漢学紀源』は『延徳版大学』とともに季安から江戸の佐藤一齋へ届けられており、本稿の論旨の展開と密接に関わるからである。この『漢学紀源』は全四巻で、三十七の項目から構成されている。巻一は、堯舜禹から孔子へと続く儒教の道統から説きおこし、我が国に儒学が入ってきたこと、奈良時代以降の各時代の儒学の状態、新注と古注等を述べ、巻二は五山の僧侶から桂菴に至る学統を明らかにし、巻三、四は桂菴から繋がる学統、いわゆる薩南学派について詳述している。『漢学紀源』は、我が国における漢学の起源、各時代の儒学の状態、五山文学、更に桂菴及びその学統をまとめたもので、漢文で書かれた日本儒学史と言えるものである。

三

本章では、伊地知季安が佐藤一齋へ桂菴の碑銘の執筆を依頼した経緯をまとめておく。

天保十一年（一八四〇）季安五十九歳の時、彼は時の大儒・佐藤一齋に『延徳版大学』を送り、更にその考証のために『漢学紀源』、『桂菴和尚画像』、『桂菴和尚家法倭點』、『論語寫本』をあわせて送り届け、桂菴の碑銘を

請い求め、桂菴和尚の画賛、『延徳版大学』の跋文を求めた。季安の「桂菴禪師碑銘建方一件」には、そのことを次のように言う。

去秋、伊集院氏高輪詰出立三付、林家用人佐藤一齋方へ桂菴和尚碑銘并同像之畫讚、且延徳版大学之跋文等頼、認方頼舎外に拙者相糺書述置、漢学紀源、又は家法和點論語寫本等、為考証、添遣置候、一件成書寫。

さてこの時、佐藤一齋は季安より十歳年上の六十九歳であった。佐藤一齋（一七七二—一八五九）は美濃の人で、若い頃中井竹山に学び、寛政五年（一七九三）二十二歳の時、林家の門に入った。寛政十二年（一八〇〇）には、肥前の松浦家に招聘され清国の客人と応対し、講義をして同年九月江戸に帰った。彼の学識は次第に知れ渡り、諸大名も彼の講義を請う者が多く、その門人は三千人と称された。また、林述斎没後は幕府の儒官に抜擢され、昌平黌で講義をした学術・徳望ともに優れた大儒であった。

一方、季安は一地方の薩摩に居住し、しかも無官の身であつて、おそらく季安にとつて時の大儒・一齋は雲の上のような存在であつたに違いない。もちろん季安は一齋と一面識もなかつた。一齋が季安と一面識もなかつたことが窺えるのは、一齋の「題延徳版大学鈔本後」の次の記述である。

聞くならく、伊地知氏は薩の著姓爲り。余未だ其の人を識らず。然れども其の重貞の同族爲るは、則ち顯然なり。

一齋は、伊地知季安を『文明版大学』を刊行した伊地知重貞の同族であるという程度しか知らなかつた。では、どの様にして季安が一齋に『延徳版大学』や『漢学紀源』等をお届けることができたかという点、それが窺える記述としては季安の「呈一齋佐藤先生書」の中に、

今幸ひに兼誼に由りて之に紹介され、遂に讚惠を蒙るを獲。實に天良の縁に似たり。

とあり、当時薩摩から江戸に向かう伊集院兼誼がかつて一齋の講義に出ていることがあり、そのつてを頼りに季安は伊集院に『延徳版大学』や『漢学紀源』等の品物を託し、それらを一齋に送り届けるのであつた。

さて、『延徳版大学』や『漢学紀源』等を受け取つた一齋は、それらの資料を検討して薩摩が宋学の先駆地であることを初めて知つて驚いて次のように言う。

是に由りて之を觀れば、本邦の宋學の盛興は、惺窩羅山兩先生の時に在りと雖も、其の我に入るの始めは、則ち尚寛かに百有餘年前に在り。而して薩は殊に先鳴爲るなり。〔題延徳版大学鈔本後〕

藤原惺窩、林羅山によつて我が国の宋學の基盤は確立したが、元をたずねるとその宋學は惺窩・羅山のはるか以前に、薩摩の地で開花したのであった。ではなぜ、薩摩が宋學の先驅地であることや『延徳版大学』の存在が当時中央では知られていなかったかということを一齋は次のように分析する。

但だ、其の南裔に僻在するを以て、京畿の人文の盛んなるに如かず。其の學は存すと雖も之を繼ぐ者は或いは人に乏しく、遂に亦是の如きの寥々なり。〔題延徳版大学鈔本後〕

つまり、薩摩は僻遠の地に位置し、かつ良き後継者が育たなかったために、桂菴の學統は当時衰えてしまつたのである。事実、桂菴から月渚、一翁、文之、如竹へと続く薩南學派は、室町後期から江戸初期にかけて栄えたが、その後は衰えてしまふ。従つて、薩南學派の學統が衰え沈滞して既に百年以上経つていたので、一齋は薩摩で刊行されていた『延徳版大学』の存在を知らなかつたわけである。一齋は、季安からの『延徳版大学』等を受けとつたことで、初めて薩摩が宋學の先驅の地であることを知り驚くのであった。

ところで、一齋は碑銘依頼のため送られてきた『延徳版大学』や『漢學紀源』等の資料自体をどの様に評価していたのだろうか。それを一齋と季安、一齋に取り次いだ伊集院兼誼とのやりとりから窺うと、先ず一齋が兼誼へ送つてきた天保十二年二月十五日付の手紙には、

然ば先達而は延徳版大學、其外五種御示被下辱仕合。早速返完可仕之處、珍敷御品に候間、大學は其通爲寫置申度、漢學紀源も至極詳審なる事に而得益不少奉存候。就而は是も爲寫可申哉。今暫留置申度候。

とあり、一齋は『延徳版大学』を写したい、また『漢學紀源』も詳細であるのでやはり写したいと申し入れ、しばらくそれらを手元に留め置きたいと述べている。更に、季安から託された資料を一齋に届けた伊集院兼誼は、後に再度一齋に面会し、季安から届けられた資料に対する一齋の評価や考えを詳細に知るに至つた。兼誼は、その事情を手紙（天保十二年五月十日付）に記し季安に送つた。

延徳版之大學誠珍敷希ば板に彫せ度候得共、どふぞ今一本出候はば被下度、板彫せ候儀は此方取計可申、何卒

願候との事に候。餘珍數故、惣而寫度候得共不相叶候に付、跡先一枚ツツ加様に手づから寫置候由にて見せ被申候。跡先一枚宛は薄やう紙に字形ウツロに取候。墨を込被申やう相見得、蟲喰など迄も細にうつし右に間々異同之所迄を被書抜候。左候而咄に林家も別而珍賞被申寫調、聖堂へ納置被申度との事故、当分彼方へ遣置候。どふぞ今暫借置くれ候やう被申候。

一齋は『延徳版大学』が珍しいので版に彫りたい、もう一本出てきたら自分に分けて欲しいと願っていることがわかる。更に一齋はすでに『延徳版大学』の最初と最後の一枚を虫食いなどの箇所を含めて、詳細に書き写していることが窺われる。しかも、一齋が林家にも取り次いだ結果、林家もこの『延徳版大学』を珍重し、それらを書き写して聖堂に納め入れるので、もうしばらく一齋の手に留め置くことになったのである。

この様に幕府の儒官となって文教政策を担当した林家や当時の儒林中の泰斗で門人が三千人と称される佐藤一齋が挙つて『延徳版大学』を写したことは、薩摩の地に埋没していた『延徳版大学』の価値が実は非常に高いことが窺われ、しかもそうした行動は彼らの門人達にも直接に多大な影響を与えたと考えられる。

さて、一齋は季安より作成を依頼された「桂菴禪師影贊」、「桂菴禪師画贊」、「延徳版大学跋文」のうち、依頼の翌年の天保十二年に先ず「桂菴禪師影贊」及び「延徳版大学鈔本跋」を季安へ送り届けた。季安は一齋に礼状をしたため何度か謝意の書簡を送る。そして、天保十三年にやっと江戸の一齋から伊集院兼誼を介して季安へ桂菴の碑銘が届いた。これは、天保十一年の依頼から二年後のことで、この様に遅れた理由について、一齋は同時に伊集院兼誼に届けた書簡（天保十三年八月二十二日付）の中で次のように言う。

然ば兼々伊地知君より御頼之桂菴師碑文、段々延緩及於今日候。拙事も客冬より身分替り望外之仕合。扱々老境不堪事恐悚不少候。右之次第にて精々之御頼も誠に草々之作文尊意に満申間敷候得共、指出申候間、伊地知子へ御届被下度候。

林述斎の死去にともない、一齋の身分が大きく変わり、幕府の儒官に抜擢されたため碑銘の作成が遅れた旨を述べ、そのことを謝っている。更に、この書簡の中で送り届けた桂菴碑銘が修正されてもかまわないとも述べている。若し貴意に不應候事は其文御増損有之候ても不苦候。遠方之事故、往復手間取可申候付、御勝手次第に可被成

候。

そして、同じくこの書簡の中で『漢学紀源』についてはそれを写そうとしているがなかなかどっていないことにも言い及んでいる。

将亦漢學紀源久々留置辱存候。寫し可申と去年より舍居候處へ前文之身分一變にて誠に事多に相成、其所へ及不申候。

一齋からの桂菴碑銘と書簡を受け取った季安は、謝意を述べるとともに、実際に修正の願いを申し出ている。それを受けて、一齋は翌年の天保十四年に自らが作成した桂菴禪師の碑銘に改訂を施し、修正した原稿を季安の元に送り届けている。一齋がどの様に修正したかは次章で検討するが、季安から一齋への修正を依頼した書簡を考察することで、桂菴碑銘の作成過程及び具体的な修正箇所が窺われて興味深いし、また当時の碑銘作成のやり方の一端が具に明らかになると考える。

四

先ず、季安は一齋から送られてきた桂菴の碑銘を受け取って謝意を述べる手紙（天保十三年九月二十九日付）の追伸に、明らかな誤りを指摘して次のように述べる。

將亦御草稿之内桂菴遷化文龜五年と被遊候得共、是は永正五年にて御座候。

一齋は桂菴の遷化の年を間違えていたのであり、季安はそのことを指摘した。これは、おそらく一齋のうっかりミスであろう。ただ季安は、こうした単純ミスだけでなく、一齋が作成した桂菴の碑銘の記述をより事実在即することを旨として、具体的な修正箇所を指摘し、全てで百七字書き加えることを要請した。その具体的内容の一端が窺えるのは、次に挙げる一齋に修正を取り次いだ松山隆阿彌宛の書簡（天保十三年十二月一日付）で、その中で季安は言う。

桂菴之行實に付好古之僻欲に而相考候へば、今少御収載奉願度事有之。重疊乍恐初而桂菴吾藩へ爲參年月又は

寺立候年紀、或は大學章句致印行候年紀且地名、或は桂樹院にて致再刊候年紀、或は明應十年家法和點著述爲有之大意、并久數梓行に成居候譯共は、野拙多年古本を搜集、只今は證據も明白に御座候得共、兎角私體之綴置候文は一旦之反古にて無程及湮滅儀差知れ是迄盡力糺得候。事蹟年月等先生此度之御撰文に被爲洩候而は後人之信用も薄く、旁永年之遺憾と奉存、誠に乍恐今一往再願之念望有之。

これに關連して、『漢字紀源』の卷五には、「桂菴禪師碑銘稿」として天保十三年九月二十八日に季安が受け取った初稿があり、更に同年十二月一日に季安が一齋へ送った修正を要請した原稿がある。今それらに着目して、前述の松山宛の書簡の内容の部分について、季安が一齋の「桂菴禪師碑銘稿」のどの箇所をいかに修正するように依頼したのかを確認したい。そこで次に、初稿（「桂菴禪師碑銘稿」）と修正を依頼した原稿の該当箇所を挙げる。尚、（一）内は季安が書き加えることを要請した語句である。

○「初稿」公乃厚聘師、師遂來薩摩、

「修正」公乃厚聘師、（十年二月）師遂來薩摩、

○「初稿」特加禮敬、乃命剋一寺於魔府、

「修正」特加禮敬、（明年）命剋一寺於魔府、

○「初稿」曰桂樹、師又與國老伊地知周防守重貞

「修正」曰桂樹、（十三年夏）師又與國老伊地知周防守重貞

○「初稿」始刊大學章句、實皇國印行新註之嚆矢也。

「修正」始刊大學章句（於魔府）、實皇國印行新註之嚆矢也。

○「初稿」自後數往數還、至明應九年、

「修正」自後數往數還、（弟子益衆、時新刻大學盛行、板亦漫漶、至延徳四年、師再瑛諸桂樹禪院¹³）至明應

九年、

○「初稿」尋轉南禪寺、居週期、辭歸於薩著一書、

「修正」尋轉南禪寺、居週期（未幾辭職明年）、歸於薩（嘗精訂國讀以授其徒至是別）著一書、

伊地知季安と佐藤一齋（東）

桂菴が薩摩にやってきた年月、島陰寺ができた年月、『大学章句』を刊行した場所、『延徳版大学』を刊行した年月と地名、更に『延徳版大学』刊行の経緯、『桂菴和尚家法倭点』刊行の年月等を書き加えることを季安は一齋に要請した。これ以外の部分においても、同様の観点から七カ所程の修正を要請している。季安がこうした要請を行ったのは、前述の書簡からも明らかのように、彼自身が依頼した桂菴の碑銘が後世に高く評価されかつ信用されるためには、年月や地名等の事実関係をはっきり明記しなければならぬと考えたからである。かてて加えて、いわば歴史の中で埋没していた桂菴を初めて発掘し、詳細に考察したことに裏打ちされた自負心が、季安をして事実をより正確に記して欲しいという思いに駆り立たせたからであろう。そして、かくも多くの修正を願ひ出た手紙の筆致からは、おそらく一齋から送られてきた桂菴碑銘の初稿の記述は季安にとつて物足りないものであったに違いないことが窺える。ただ、一齋にも同情すべき点がある。というのも、彼は従前には全く桂菴に対する知識がなく、今回彼が桂菴の碑銘を書くに当たつて掘り所にしたものは、他でもなく『延徳版大学』と一緒にその考証資料として届けられた季安の『漢学紀源』の記述なのであった。それが窺えるのは、次の「題延徳版大学鈔本後」の記述である。

桂菴嘗て明国に航し居ること七年、程朱の學を尊信す。初めて其の洛に入るや……詳しくは紀源の中に載す。就て攷すべし。

一齋は季安が自分より桂菴のことに詳しい事に配慮して、碑銘修正の要請にできる限り応じたものと思われる。一方季安の方も、時の大儒である一齋に修正を要請するに当たり、独断ではなくその修正の仕方を含めて新納伯剛、宮内清之進、五代直左衛門等の諸儒や山田有裕、市来政正の造士館教授に相談して事を進めている。

右之通朱書之分と一往頼遣改補いたし貫度、新納伯剛、宮内清之進、五代直左衛門殿にも致持参、篤と及相談、其上山田有裕、市来教授などにも吟味相頼、何ぞ存寄無之旨承知。伯剛被申候は右之成に而は大先生之文を此方より相直様有之に付、外に書付遣可然と之事承……

ここに、一齋への礼を失しないようにとの季安の配慮が窺える。他にもお互いの意向を打診した書簡が幾編か残されている。桂菴の碑銘作成に関しては、まず季安が桂菴の資料を収集してまとめ、それに基づいて一齋が碑文を

作成し、次にその内容を季安が検討し、更に一齋に具体的に修正箇所を提示して修正を要請し、それに応じて一齋が原稿に改訂を施して碑銘は完成したことになる。依頼者・季安と作成者・一齋が互いに配慮しつつ、何度もやり取りを行い、碑銘を完成へと導く過程が窺われ、当時の碑銘作成の方法の一端が浮かび上がって興味深い。

五

伊地知季安が桂菴の碑銘の作成に力を尽くしたのは、桂菴の功績は見逃せない程素晴らしいにもかかわらず、江戸はもろんのこと薩摩に於いてさえその存在は忘れられており、是非とも顕彰せねばならないと思いつたためである。そのことについて、季安は「呈一齋佐藤先生書」のなかで次のように言う。

而して桂菴の事に及びて、師嘗て明に使し、肇めて宋學を傳ふ。其の功偉と雖も彰かならず、其の徳盛と雖も傳はらず。是に於てや、僕其の人に非ずと雖も行實を采輯し時の名家を求め、以て碑文を先生に請ふに至る。

季安は文化朋党事件に連座して四十年の無役の間、様々な資料を日夜渉獵し、儒学史の研究の方面に於いては、朱子学の書籍（『大学章句』）が他ならぬ薩摩で我が国で初めて出版されたことを確認し調査したが、そのことが世の中で注目されず、埋没していることに気づく。そこで、季安はこの『大学章句』とその刊行者である桂菴を世の中に知らしめ、正当な評価を受けさせねばならないという使命感を抱いたと考えられる。更に、薩摩に生まれた季安が、郷土の先輩・桂菴を慕うという郷土愛、そして桂菴とともに『大学章句』を刊行した伊地知重貞は、直系の先祖ではなく時代も隔たっているけれども、同じ一族としてその存在を顕彰したいと言う気持ち結び合わされて、にわかには衝き上げてくる昂まりを抑えきれずに、桂菴碑銘作成の行動をおこしたと言えよう。

ところが、季安の桂菴の碑銘建立の計画は、当時季安が在野で無官の身であったこと、かつ季安が単独でこのことを計画し、史館の頭越しに行ったので、どうもその反発をかい薩摩藩の中で問題化していたようである。そのことは、天保十三年七月二十九日付の伊集院兼誼から伊地知季安宛の書簡に窺える。

碑銘に御建立に付ては教授も至極同意之由候得共、史館之向何様可有之哉。かやう之義至てやかましく被申由

も承居候。彼向御談合之上教授より被申出御免しを被得候方、御丈夫之事と存候。

ここでは、問題が解決されるように思われていたが、その後桂菴碑銘建立はしばらく中断されることになり、季安は自らの書物六十余冊を史館に没収されてしまった。更に彼は、これ以前にもしばしば筆禍を起こしていたように、

僕少きより獨學し、淺陋にして記述に拙きと雖も、僻性にして古を好み、事に逢ふごとに稽ふべく、細釋研究し動すれば力を量らず。漫りに蕪辭を綴り、以て君子の諄を招くに至る。亦、惟だ吾の好む所に従ひ、確説を探るを努め、未だ始めより毀譽得失の其の間に集まることを顧みず。

(「呈一齋佐藤先生書」)

と言ひ、季安の書物の内容が時として君主の諄りをも招くことがあった。しかし、季安は自らの書籍の内容については決して信念を曲げず、毅然たる態度をとつたのである。また、渡辺盛衛は、季安が博学で物事に精通していたので、史館にとっては「奉行以上に薩藩の舊記に精通した先生の存在は眼の上の瘤の如き感があったであらう」と言う。この様に、平素から要注意人物と見なされ、しかも当時無官であった季安が史館の頭越しに幕府の儒官である佐藤一齋に桂菴の碑銘を請い求めたのは、相当に勇氣のいる大胆な計画であつたと言えよう。

思うに季安は、桂菴の碑銘作成だけの為にかかる行動をとつたのではなく、おそらく季安には時の大儒で漢学の權威である佐藤一齋に『漢学紀源』等の自己の学問を知ってもらいたいという思いがあつたのではないか。確かに『漢学紀源』は『延徳版大学』の考証の資料として送つたものであつた。しかし、結果として一齋は季安の『漢学紀源』を高く評価し、しばらく手元に留め置き、書き写そうとしている。その事を聞いた季安はあたかもそれを待ち望んでいたかの様に一齋に序文の作成を要請し、更に『漢学紀源』の修正を願ひ出ている。季安より一齋に宛てた天保十二年八月八日付の書簡の附言に次のように言う。

伏して願ふに、先生鄙情を隣察し、老いを力めて稿を起こすこと幸ひなること甚だし。且つ紀源の如きは陋拙杜撰にして固より先生等に示すに足らずと雖も、之に潤色を乞ふ。只願ふに若し少しく補正を加ふるを得、以て還賜さるれば、何ぞ幸ひなること之に如かん。伏して垂憐を乞ふ。

大儒・一齋に序文を草してもらふことは、季安にとって望外の喜びであり、一齋に高く評価されたことは、季安

のこれまでの不遇の期間の学問が認められたことになる。振り返って考えると、季安は官に就くことが叶わず、十六歳の時やっと鳥津斎彬によって認められ官に就くことができたが、それ以前は薩摩に於いて彼の学問はなかなか認められる機会がなかった。四十年近くの真摯な学問探求の成果を活かす機会が全くなかったと言える。かかる状況を何とかして打破したいと考えるのは、至極当然のことであろう。そこで、桂菴碑銘作成の依頼をきっかけとして、季安が一齋に自己の学問の成果を合わせてアピールしようとしたと考えても何ら不思議ではない。『漢学紀源』があくまで『延徳版大学』の考証資料としてのみの目的で一齋へ送られたとするならば、『延徳版大学』の由来や特色、あるいはせいぜい桂菴の事績等が記されていれば足りるわけである。ところが、『漢学紀源』には儒教の道統から説きおこし、我が国の各時代の儒教の状況や五山の状況等についての季安の詳細な考証が余すところなく書き記されている。この書物を一齋に送り届ければ、季安の儒学研究の成果が一目で顕然と示されることになる。つまり、季安が『漢学紀源』を一齋に送り届けたことは、『延徳版大学』の考証だけを目的としたものではなく、当時の儒林中の泰斗である一齋に自己の学問の成果を知ってもらい、延いてはそれを認めてもらいたいとする季安の私的な意図が少なからず含まれていたと言える。更に、史館を通すという正式な手続きを踏まずに季安が行動を起こしたことも、彼の私的な側面が濃厚に含まれていたことを如実に物語っている。この様に季安が史館の頭越しに桂菴の碑銘を幕府の儒官・一齋へ依頼した行動は、薩摩藩での当時の季安の立場からして、当然何らかの咎めを受ける可能性があり、彼自身そのことは十分承知していたのではあるまいか。ただ、六十歳近くになっても薩摩では認められず、ずっと在野の暮らしの季安にとっては、もはや失う物は何もなかったと言つてよい。しかも、彼は四十年近くに及ぶ不遇な在野期間に打ち込んできた学問に絶対の自信を持っていた。それ故、史館を無視した形をとってかかる行動に打って出たと言えるのではないだろうか。

六

季安から一齋へ届けられた、いわば日本儒学史と言うべき『漢学紀源』は、後の我が国の漢学研究に多大な影響

を与えることとなった。『漢学紀源』については既に別稿で論述したが、その最大の特徴は、従前には等閑視されていた五山の学僧に着目し、本格的にその考察を行い、五山文学の流れを我が国で初めて詳細に明らかにしたことである。つまり、我が国の漢学研究に於ける五山文学の考察は、『漢学紀源』の論述を出発点としていることになる。とりわけ、明治期における我が国の漢学研究書はその大部分が確実に『漢学紀源』の考察を踏まえている。今日まで益することの多い明治期の漢学研究書は、実は『漢学紀源』に依拠して、その論述を展開させていたのである。¹⁹⁾

当時忘れ去られていた、我が国の朱子学書籍刊行において重要な意義を持つ『延徳版大学』や後の儒学史研究に多大な影響を与える『漢学紀源』を中央に知らしめる直接のきっかけとなった出来事が、他でもなく伊地知季安が佐藤一齋に桂菴の碑銘を依頼したことである。季安の直接の目的は、忘れられていた桂菴の顕彰で、そのために時の大儒・佐藤一齋に桂菴の碑銘の作成を依頼したのであった。しかしながら、現在から考えると、桂菴碑銘より『延徳版大学』やその考証資料として一齋へ送られた『漢学紀源』の存在が一齋を介して当時の文壇に知れ渡ったことの意義の方が大きい。つまり、季安が一齋に碑銘を依頼し、『延徳版大学』や『漢学紀源』を送り届けたことをきっかけとして、我が国に於いて実は薩摩が宋学の先駆地であることが中央の文壇ではっきりと認識され、『延徳版大学』を一齋や林家が書写したため、その存在は後学に少なからず影響を与えたと見えよう。しかも、『漢学紀源』により我が国の儒学史を考える上で重要な五山の学僧の学問が初めて詳細に跡づけられ明らかにされた。これは、我が国の儒学史研究史上に新しい扉を開いたことになる。以上から考えると、伊地知季安が佐藤一齋に桂菴の碑銘を依頼した事は、単なる個人的依頼のレベルに止まらず、日本儒学史の研究を考える上で大きな契機を与えた看過できない、事件“であったと言っても過言ではない。

注

(1) 「題延徳版大学鈔本後」は薩藩叢書版『漢学紀源』(明治四十二年八月、薩藩叢書刊行会)に附録という形でつけ加

わった巻五部分に収められている。本稿ではそれに基づいた。以下同じ。

- (2) 桂菴の事績は、主に伊地知季安『漢学紀源』桂菴第二十八の記事を参照にした。尚、「桂菴」は、「桂庵」と表記する資料もある。本稿では、便宜上『漢学紀源』の表記「桂菴」に従った。

- (3) 本稿においては、『漢学紀源』は薩藩叢書版（明治四十二年八月、薩藩叢書刊行会）を用いた。以下同じ。

- (4) 桂菴は従前の博士読みとは違い、秘伝的ではなく何人にも理解しやすい訓点を創出した。これが桂菴点である。この桂菴点は、当時の訓読に大きな影響を与え、訓点法が大きく変化するきっかけを与えた。今日その内容は『桂菴和尚家法倭点』により窺い知れる。

- (5) 伊地知季安の経歴については、その子・伊地知季通が書き記した碑銘、西村天囚『日本宋学史』（梁江堂書店等、明治四十二年九月）所収の伊地知潜隠伝、及び渡辺盛衛「伊地知季安先生事蹟」（薩藩史研究会、昭和九年十二月）を参照にした。詳しくは拙稿「伊地知季安の『漢学紀源』について」（鹿児島大学文科報告第三十二号、平成八年八月）を参照されたい。

- (6) 『雲遊雜記傳』は、「鹿児島県史料集（XI）」（五味克夫編集校訂、鹿児島県史料刊行委員会、昭和四十六年三月）所収のものを用いた。

- (7) 『管窺愚考』についても注（6）「鹿児島県史料集（XI）」に収められている。

- (8) 『漢学紀源』については、拙稿「伊地知季安の『漢学紀源』について」（鹿児島大学文科報告第三十二号、平成八年八月）を参照されたい。

- (9) 「桂菴禪師碑銘建方一件」は、薩藩叢書版『漢学紀源』巻五に収められているので本稿ではそれを用いた。

- (10) 「呈一齋佐藤先生書」は、薩藩叢書版『漢学紀源』巻五に収められている。本稿ではそれを用いた。以下同じ。

- (11) 以下本稿で取り上げる書簡は、いずれも薩藩叢書版の『漢学紀源』巻五に収められているものである。これらの書簡を区別するために、本稿では書簡に記載されている日付と季安の事績から考えてその書簡が書かれた年を推定して付すことにする。

- (12) 佐藤一齋『愛日樓全集』（東京都立図書館、河田文庫所蔵）に「桂菴禪師碑銘」が収められている。これは、季安の伊地知季安と佐藤一齋（東）

手元に残っている「桂菴禪師碑銘稿」（『漢字紀源』所収）と文字には一部異同がみられるものの、基本的には軌を一にした原稿であると言える。ただ注目すべき異同は、桂菴遷化の年が『漢字紀源』所収の「桂菴禪師碑銘稿」では文龜五年で、『愛日樓全集』所収の「桂菴禪師碑銘」では永正五年となっていることである。つまり、『愛日樓全集』所収の「桂菴禪師碑銘」は、天保十三年九月二十九日付の季安の書簡の中で、桂菴遷化の年が間違っているという指摘を受けて、一齋が修正をしたものと思われる。ちなみに、『愛日樓全集』所収の「桂菴禪師碑銘」では、天保十三年十二月一日付の書簡の中で季安が要請した修正箇所については全く修正が施されていない。従って、東京都立図書館、河田文庫所蔵の『愛日樓全集』の「桂菴禪師碑銘」は、天保十三年九月二十九日以降十二月一日以前に一齋が初稿を一部修正した原稿だと思われる。なお、河田文庫の調査にあたっては、国学院大学助教授石本道明氏に多くの援助とご教示を頂いた。ここに記して感謝いたします。

(13) この部分「師再葉諸桂樹禪院」は、修正を要請した原稿では「至明應九年欽奉」の後の部分に書き加えるようになっているが、意味の上からも、また決定稿から見てもこの部分に入れる指示であったと思われるので、今ここに入れておく。尚、桂菴の碑銘（決定稿）は、現在鹿児島市伊敷町の桂菴公園にある。

(14) 「居週期」は、決定稿では削られている。

(15) この書簡も薩藩叢書版『漢字紀源』巻五に収められている。

(16) 渡辺盛衛「伊地知季安先生事蹟」（薩藩史研究会、昭和九年十二月）十九頁の記述参照。

(17) 渡辺盛衛「伊地知季安先生事蹟」（薩藩史研究会、昭和九年十二月）十九頁の記述。

(18) 拙稿「伊地知季安の『漢字紀源』について」（鹿児島大学文科報告第三十二号、平成八年八月）参照。

(19) たとえば、西村天囚『日本宋学史』や井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』等には明確に『漢字紀源』の影響を見ることができ。拙稿「伊地知季安の『漢字紀源』について」（鹿児島大学文科報告第三十二号、平成八年八月）参照。

（付記）本稿は、平成七・八・九年度文部省科学研究費補助金・基盤研究（B）「薩摩藩所蔵の漢籍に関する総合的研究」（代表 東 英寿）による研究成果の一部である。